

べごのよだれ

岩手・子どもと教師の文学の会/編

中島保彦/絵



べごのよだれ

岩手・子どもと教師の文学の会/編
中島保彦/絵



岩手・子どもと教師の文学の会/編

べごのよだれ

ポプラ社 昭和53 (1978)

166p 22cm (先生のおきのお話 4)

〔分類〕 918

べごのよだれ

検印省略

先生のおきのお話 4 〈岩手編〉

岩手・子どもと教師の文学の会/編

盛岡市大通り1丁目1の16教育会館内 岩手県教職員組合 作山静男方

昭和51年2月 第1刷© 昭和53年11月 第4刷

発行者 久保田忠夫

発行所 ポプラ社 〒160 東京都新宿区須賀町5

振替東京 4-149271

印刷所 新興印刷製本株式会社 製本所 石毛製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします

8095—056004—7764

はじめに

みなさんの先生が、すてきなお話を書いてくれました。
たのしかったことやかなしかったことなど、子どもの
ころのわすれられない思い出や、つとめていた学校でお
こったいろいろなできごとなどのなかから、みなさんに
ぜひつたえたいと思うものを、いっしょうけんめいに書
いたのです。

どれもほんとうにあったお話で、ながいあいだ、先生
のむねのなかにたいせつにしまっておいたものばかりで
す。

このすばらしいおくりものを、みなさんにぜひよんで
もらいたいと思います。

高橋 昭



もくじ

はじめに 1

べごのよだれ 6

岩^{いお}あなのギャングたち 25

健^{けん}ちゃんがんばれ 47

和雄^{かずお}くんの死^し 68



正夫^{まさお}の笑顔^{えがお}

84

セメント袋^{ぶくろ}のシャツ

102

ほんとうに聞^きこえるの

115

八月とおとうさん

130

ハーモニカ

146

あとかぎ

164



編集委員

ヶ崎町立南方小学校教諭

梅森 健司

岩教組「北流」編集委員

作山 静男

児童文学者

代田 昇

岩手県子どもの本研究会

高橋 昭

ノロギ・ボッコの会

高橋 忠男

(アイウエオ順)



画家紹介

なかじまやすひこ

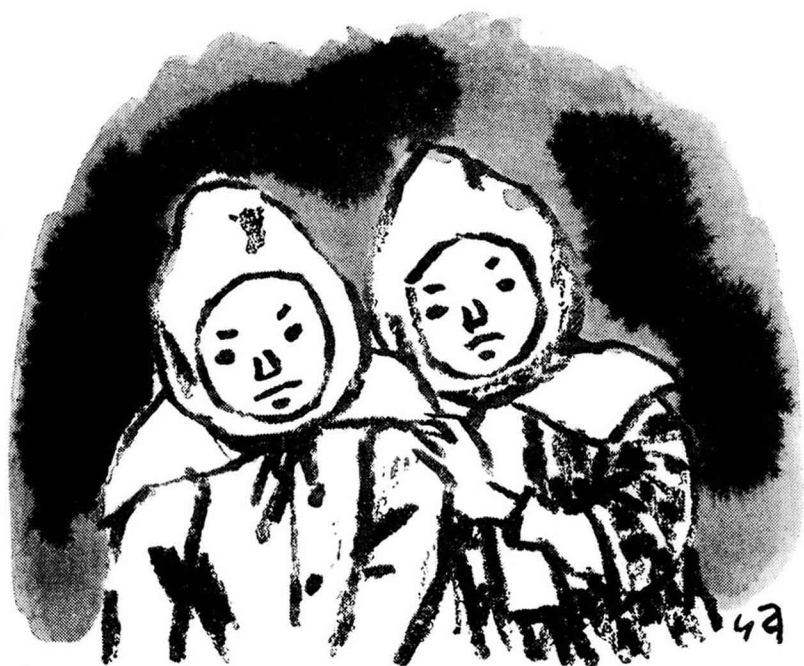
中島保彦 1922年横浜に生まれる。
主なさし絵の仕事に「三少年汽車
にのる」「さよならもいわないで」
「雪色のペガサス」「お菓子の話」
などがある。

現在主体美術協会会員，日本美術
会会員，＜ぐるーぶ・車＞同人。
現住所 杉並区松庵3の4の5

べごのよだれ

岩手・子どもと教師の文学の会/編

中島保彦/絵



べごのよだれ

高橋 たかはし

忠男 ただお



十年ほど前のこと、わたしは北上山地きたかみさんちの北部ほくぶで小さな分校ぶんこうにつとめておりました。四方小高い山しほうこだかにかこまれて、学校の前には小さな谷川たにがわが流れていました。夜になつてあたりが静かになると、その流れの音が山にひびいて、雨ふりのように聞こえました。

村では、水田はほとんど見あたらず、どこの家でも牛をかっており、山の斜面しゃめんは、あちこち牧草地ぼくそうちになっていました。

この学校につとめてまもない、ある晩ばんのことです。山小屋に一人おきざりにされたような気持ちで、宿直室しゆくちよくしつで手紙てがみを書いていました。

そのとき、いきなり表戸おもてどをドンドンたたく者がいました。

「シェンシェ、シェンシェ……。」

それは、かなりよっぱらっている声でした。まだ村人の気心きごころも知りませんでした。その呼び方に悪意あくいが感じかんられませんでしたので、すぐ戸をあけました。あけたとたんに中年の男の人が、ドサドサツとよろけながらころげこんできて、

「オラホのワラス（子ども）、よろすくたのんますじゃ。」

と、四合ごうびん（一合は〇・一八リットル）をわたしにさし出すとそのまま板いたの間に横になりまもなく大きな鼻はないびきをたててねむってしまいました。たぶんだれかのお父さんが、わたしといっしょにお酒さけを飲のもうと思つてやつて来たのにちがいません。

その気持ちはたいへんありがたいのですが、ずいぶん変なにおいがすると思つたら、おしっこでズボンをぬらしているのです。しかたがないので、そのまま宿直用しゆくちよくようのふとんをかけてねかせておきました。

よく朝あさ、子どもの声で目がさめました。それは、五年生の平吉へいきちでした。夕べゆうのよっぱらいは、いつ帰ったのか、もういませんでした。

「先生、これ、オラの父ちゃんからたのまれてきたす。」
と、焼いた川魚かわざかなを十匹びきほどくれました。

「ほう、こりや珍しい。ぼくの大好物だいこうぶつだ、ありがとう。平吉のお父さんは、魚つりが

じょうずなんだな。」

「うん、それよか、先生、オラの父ちゃん、夕べ、先生の所さ泊ったんだってな。なんか変なこと言ってたべ。」

「なあんだ、平吉のお父さんだったのか。話すどころか、戸をあけたとたんに、ねむっちゃったよ。」

「へえ。」

そんなことがあってから一週間ほどした、ある午後のことでした。子どもたちに童話を読み聞かせていたところ、いきなりガラッとおおきな音がして、教室の戸があきました。いつかの平吉のお父さんが、酒のにおいをぶんぶんさせ、いい気げんになってはいってきました。

「シェンシェ、この間はどうもシチレイしあんした。シェンシェは、ざっこが大好きだそうで。ほれ、こんなにでっけえイワナをとったもんで……。」

三十センチ以上もありそうな大きなイワナを五ひき、すぐ食べられるように、くしざしにして持ってきたのでした。

わたしはびっくりしてしまいました。授業ちゆうによっぱらいが教室にはいってく



るなんてゆめにも思っていないませんでした。でもおこってきたのではないのでとりあえずこの前のお礼をいいました。すると、すっかり気をよくしてしまって、

「オレ、ざつことが大好きだよ。これから、でっけえのをとって、シェンシェに持ってきてやつからな。さあ、シェンシェ、早く勉強を終わって、いっぺえやりますべ。」

と、ふらつきながらポケットから四合びんをとり出しました。わたしはどのようなふうにしたいしていいかわからず、目を白黒させていると、平吉が泣きそうな顔をして、
「父ちゃんのばか！ 出て行ってけろ。早くこっから出て行ってけろ。」

もう、なみだ声になっていました。ところが、お父さんは出て行くどころか、ぎゃくに平吉をにらみつけてしまいました。

「なに言ってる。親にはじをかかせる気か、このガキめが！」

その声があまりにも大きいので、教室の中がシーンと静まり、小さい子どもたちは、ぶるぶるふるえていました。平吉の妹のカヨ子は、とうとう声をはり上げて泣き出してしまいました。この学校は、複式学級といって、一年生から六年生までたった八人で、ひとつの教室で勉強していたのです。

平吉は、このようなお父さんのすがたを小さい時から何度なんども見て、すごくいやな思いをしていたのでしよう。学級会がっきゅうかいがあったとき「酒さけをきらいになる薬くすりを知っている人はいませんか」と、まじめな顔で聞いて、みんなにわらわれたことがありました。

ところが、そのよく日、「べごのよだれを飲のむと、酒がきらいになるそうだ」と言う子があらわれました。そうしたら、「そのことなら、オラホのぼっちゃ（おばあさん）も、しゃべってだじゃ」と言う子もおりました。

「へえ、そんなの本当ほんとうか。」

わたしはびっくりしました。べごのよだれというのは牛のつばのことです。この地方にそんな迷信めいしんのあることを、はじめて知りました。

そのとき、平吉の目が、みるみる変わっていくのをわたしはちらっとみたのです。

そんなことがあってから何か月か過ぎで、秋のなかばごろになりました。午後五時ごごごろになると、もうまっ暗くらになります。ですから三時半ごろには、みんな家へ帰すようにしました。わたしも早目はやめに夕飯ゆふはんをすませてふとんにはいりラジオを聞くことにしていました。一晩じゅうラジオをつけっぱなしにしてねむってしまふこともありました。

そんな、ある真夜中のことです。窓の外でだれかの声がして、目をさしました。それが平吉のお父さんであることは、すぐわかりました。

「センセ、センセ……。」

と、こんどははつきりしたことでしたので、よっぱらっていないことだけはたしかです。

何かたいへんなことが起こったのだと思います、すぐとび起きました。時計は、午前一時を過ぎていました。

「どうしたんですか。」

「こんなに遅く申しわけながんす。じつは、平吉が腹がいたいと言いまして、さっぱりなおらないもんですから。もし、学校に腹いたの薬がありましたら、ゆずってもらいたいと思いあんして。」

そうとう急いできたのでしよう、肩でハアハア息をしていました。わたしはとっさにモウチョウだったらいへんだと思いました。そこで学校の薬品箱を持って、わたしも行くことにしました。自転車の荷台に平吉のお父さんを乗せて、山みちを急ぎました。平吉の家は、山を一つこした村はずれにあります。町とちがって、月のない夜

の山みちは、じいんと底冷えのするような暗さでした。

平吉は、ひたいにあせをにじませながら苦しがつていました。ぐあいを聞いてみま
すと、どうやらモウチョウではなさそうです。食あたりじゃないかと思い、応急手
当として、食あたりの薬を飲ませると、まもなくいたみがとれたのか、平吉はねむりま
した。

お父さんは、なみだを浮かべながらお礼を言いました。あの正体不明になるくらい
のよっぱらいが、じつは、すごい子ども思いのお父さんだったのです。そのお父さん
が、わたしへのいちばんのおみやげは川魚だと思っているのでしょう。こんどは「と
っておきの魚だ」と言つて、十匹ばかりくれました。

よく朝には、平吉の病氣はけろりとなおり、元氣に学校にきましたが、ときどき考
えごとをしてるみたいに、浮かぬ顔をしていることがありました。

それは、虫の声のきれいな晩でした。星々と虫の声にさそわれて、窓辺に腰かけて
ギターをひいていました。すっかりいい気分になって夜がふけていくのも気づかない
ほどでした。

そんなときひょっこり平吉がやってきたのです。だまっただま窓の外でわたしのギ

ターを聞いていました。そのようすから、これはただごとじゃないぞと思いました。

「どうしたんだ。一人で来たのか。さあ中さはいれ。」

平吉は、部屋にはいってもあいかわらず立ったまま、だまってわたしを見つめていました。

「なんだ、どうしたんだ。よくこんなに遅く一人で来れたな。」

すると、何か言いたそうに口もとを動かしたとたんに、「ワァー」と泣き出してしまいました。しばらくして、平吉は、しゃくり上げながら、次のようなことを話し出しました。

「べこのよだれを飲むと、酒がきらいになる。」

このことばが、平吉の頭にすっかりこびりついてしまいました。

「ようし、いつかは、きっと父ちゃんに飲ませてやるべ。」

そして、今までそのチャンスをうかがっていました。すってんてんによっぱらって来たときを見はからって飲ませてやろうと思っていたのですが、いざとなるとなかなかチャンスがありませんでした。